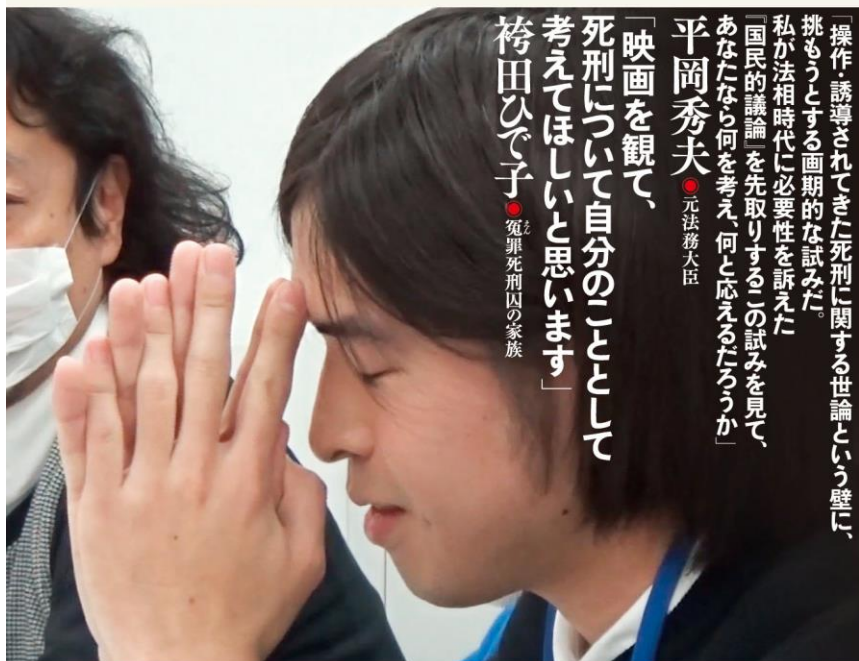
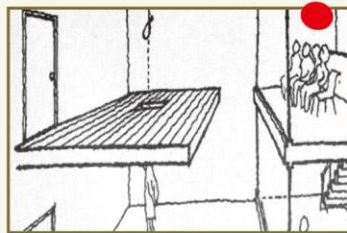


国民の8割が死刑に「賛成」?

それが、日本政府による意識調査の結果だ。「圧倒多数の支持」を、政府は死刑を続ける理由としてきた。だが本当なのか?

死刑の情報提供や議論を、政府は避けてきた。命を奪うこの刑罰を、実は人々はよく知らない。そんな中、ある研究者によって都内の会場に、一般市民135人が集められた。それは、人々の心をより深く探る「審議型意識調査」の試み。テーマは、日本の刑事制度だ。市民たちは皆、初対面。多くが死刑については賛成と言いながらも「考えたことがなかった」という。研究者は冒頭、こう宣言した——「討議してとり着いた意見を、国民の判断と考えます」。



映画を観て、
死刑について自分のこととして
考えてほしいと思います
袴田ひで子 ● 冤罪死刑囚の家族

平岡秀夫 ● 元法務大臣

操作誘導されてきた死刑に関する世論という壁に、挑もうとする画期的な試みた。私が法相時代に必要性を訴えた「国民的議論」を先取りするこの試みを見て、あなたなら何を考え、何と応えるだろうか?

「この国に足りないのは話しあいだ」
山本太郎 ● 参議院議員 俳優
「この映画で語られていることを、この国のすべての人は議論しなければならぬ。共に迷い、共に悩み、そして考え、言葉にし、言葉を聞く。決して思考停止しないための、意欲的で真摯な映画だ」
雨宮処凛 ● 作家 活動家
「死刑というものを、まじめに本気で考えるきっかけを、この映画は与えてくれる」
田原総一朗 ● ジャーナリスト

—— 知って、揺らぐ。語り合って、悩む。

2日間の調査ではまず弁護士や専門家、犯罪被害者などから話を聞く。続いて、市民どうし意見を述べ合う。すると市民たちは、さまざまな反応を示し始めた。死刑に反対する被害者も存在すると知って「死刑支持が揺らいだ」という若者。死刑が犯罪を減らすとは証明できないと知って「もっと苦しい刑罰が必要かも」と言い出す中年男性。冤罪による死刑判決の多発に、とまどう若い女性。知ることで初めて悩み、自分とまったく違う意見に触れて悩み、当たり前と思ってきた考えを揺さぶられる“世論”の担い手たちを、カメラは捉え続ける。答えの出ない議論のなかで、“普通の人々”の意識に何が起きるのか? 混とんから立ち現れる、“世論”のほんとうの顔とは…。市民が自ら考え悩むことの意味を、映像は問いかける。



ドキュメンタリー映画
望むのは死刑ですか
考え悩む“世論”

<http://nozomu-shikei.wix.com/movie>

自主上映会をしませんか? 形態不問・料金応相談 yoh340san@gmail.com 長塚洋まで

2017年1月26日(木) 18時上映

(17時30分開場)

会場：難波別院(南御堂)同朋会館講堂

大阪市中央区久太郎町 4-1-11

参加費：無料

お問合せ：真宗大谷派大阪教務所 ☎06-6251-4720

主催：真宗大谷派大阪教区教誨師会

後援：真宗大谷派難波別院(南御堂)

